

令和元年6月18日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07239

研究課題名（和文）パイン産業の変遷にみる歴史と文化の再構成 沖縄、台湾、フィリピンを中心に

研究課題名（英文）Reconstruction of the History and Culture of Pineapple Industry: From the Case Studies of Okinawa, Taiwan and the Philippines

研究代表者

安里 陽子（Asato, Yoko）

同志社大学・研究開発推進機構・助手

研究者番号：30802582

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は帝国の植民地で発展したパインアップル産業に着目し、環太平洋を横断的に扱うことで一国史では捉えられない産業に携わる人やモノおよび技術、資本の移動を捉え、産業の発展において人びとの経験はどのように関係していたのかを描き出すことである。具体的には沖縄、台湾、フィリピンをはじめ東南アジアにおけるパイン産業に関わる人やモノおよび技術、資本の移動をたどり、人びとの経験やパインにまつわる表象の変化にはどのようなポリティクスが働いているのか明らかにすることを目的とした。また米軍占領期沖縄でのパイン産業の発展には、環太平洋における移民の重層的なネットワークが大きく関係していた点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではパインアップル産業における人やモノおよび技術、資本の越境的な移動をたどることで、国民国家を枠組みとした研究では見落とされてきた、越境的な人びとを主体にした歴史や文化を描くことを目的とした。それは近年歴史学や文化研究などで議論が活発化している一国史観を見直す研究動向に重なり、研究成果の蓄積への寄与はもちろん、歴史や文化を越境的に捉え記述する新たな枠組みの提示に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This research examined how the history and culture of pineapple industry in Okinawa, Taiwan and the Philippines as colonies was far away from the conventional national history focusing on the pineapple industry developed at colonies such as Taiwan and the Philippines of the empires namely Japan and the United States. When focused on the mobility of people, pineapples, technique and capital among empires, colonies and others, different picture can be seen. Development of the pineapple industry in the US occupied Okinawa was deeply related to multi-layered networks of the emigrants around Pacific rim.

研究分野：社会学

キーワード：米軍占領期沖縄 パインアップル産業 琉球華僑 八重山 ハワイ USCAR 普及事業

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

経済のグローバル化が進み、資本や商品、労働者が国境を越えて移動する現在、従来の国民国家という枠組みのみで社会を捉えることはできなくなって久しい。また従来の移民研究などのように、送出国と受入国の二国間だけで移民の動向を捉えることも難しい状況にある。こうしたなか、国民国家史観による一国史では捉えられないグローバル・ヒストリーという歴史叙述を試みる研究が近年国内においても顕著に増加している（秋田茂 2013『アジアからみたグローバル・ヒストリー—「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』）。また移民研究においても、二国間移動から複数の国への移動経路を捉える研究が出てきている（宮原暁 2010「ポスト近代の「文化」とディアスポリック・チェーンズ—「中国系フィリピン人」の再移民をめぐって」）。

一方、国外の研究では、国民国家史観または二国間の移動といった研究を批判的に捉える試みはすでに多方面でおこなわれている（ジョルダン・サンド 2015『帝国日本の生活空間』、キース・L・カマチョ 2016『戦禍を記念する—グアム・サイパンの歴史と記憶—』）。たとえば帝国主義を批判的に捉える研究には、米軍占領下沖縄における沖縄とアメリカの家政学者である女性の越境的な活動がアメリカ帝国主義を拡張する一端を担いってしまう面を描き出した小碓 (Koikari, Mire 2015 *Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa: Women, Militarized Domesticity, and Transnationalism in East Asia*) の研究があげられる。

パイナップル産業関連の先行研究としては、パイナップルの栽培や産業化に関するものが多く存在する。国内の研究では、パイナップルの栽培地である沖縄や奄美における農学的な研究が豊富である。たとえば戦前期に大日本帝国の植民地となった台湾でのパイナップルの栽培や、戦後の沖縄や奄美におけるパイナップル産業の発展に関する研究があげられる（渡辺正一 1958「琉球パイナップル産業考察並びに振興対策」）。近年注目を集めているものとしては、沖縄にパイナップル産業を導入した台湾系の人びとに関する社会学的な研究がある。一例に、沖縄では戦後の米軍占領期に生じたパイナップル boom 時に台湾から多くの労働者が導入されたことを明らかにしたものや、沖縄が日本復帰する際に帰化することとなった台湾移民への聞き取りをまとめたものなどがあげられる（八尾祥平 2010「戦後における台湾から「琉球」への技術者・労働者派遣事業について」、松田良孝 2004『八重山の台湾人』）。英語圏におけるパイナップル産業関連の研究では、農業的な研究はハワイやフィリピンなどにおいてもかなり蓄積があり、パイナップル産業の歴史をグローバル・ヒストリーの一環として捉える研究もすでに存在する（Gary Y. Okihiro 2009, *Pineapple Culture: a History of the Tropical and Temperate Zones*）。

本研究はこうしたグローバル・ヒストリーの試みと同様に、パイナップル産業の発展と労働者として従事した人びとの歴史とを重ねて捉えることによって、歴史と文化の再構成を試みる。筆者はこれまで、沖縄のパイナップル産業の発展に貢献した台湾系の住民が集会的なアイデンティティを形成する過程について論じてきた。さらに、1950年代後半以降における米軍占領期沖縄でのパイナップル boom の登場について、日・米・琉球政府の経済政策だけではなく、アメリカの通貨政策自体も深く関係していたほか、パイナップル種苗の輸入や技術導入でハワイや台湾、東南アジアの沖縄出身者や台湾人とされる人びとのネットワークなど、植民地および冷戦構造の中で広がったネットワークが活用されたことを明らかにしてきた。

そのうえで筆者は、沖縄、日本、台湾、アメリカにおいて、パイナップル産業を事例に、そこにかかわる資本や労働力の移動にはとどまらない動きをとらえる必要性を感じた。例えばパイナップル産業にかかわる農業技術の伝播は、沖縄の例でも明らかのように、米軍占領期だけの動きではなく冷戦期という国際状況、ひいては植民地期台湾でのパイナップル産業の発展とも深く関連しているといえる。本研究では、パイナップル産業における越境的な人、モノおよび技術、資本の動きをたどることによって、一国史的な歴史では捉えることのできない人びとの主体性形成に関わる営みを描き出そうという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、帝国の植民地で発展したパイナップル産業に着目することで、一国史では見通すことができない産業に携わる人やモノおよび技術、資本の移動を捉え、産業の発展において人びとの経験はどのように関係し相互作用していたのかを描き出すことである。具体的には沖縄、台湾、フィリピンをはじめ東南アジアにおけるパイナップル産業に関わる人やモノおよび技術、資本の移動をたどり、人びとの経験やパイナップルにまつわる表象の変化にはどのようなポリティクスが働いているのか明らかにすることを目的とする。

本研究期間内においては、戦後の米軍占領期沖縄を中心に、冷戦期におけるパイナップル産業の変遷に焦点を当て、それはどのように植民地期におけるパイナップル産業の構造と接続し、再編されたものであったのかをまず明らかにする。次に戦後の米軍占領期沖縄でのパイナップル産業の発展において、産業に従事した人びとの移動経路や技術の伝播過程について明らかにする。続いて、そこでは戦前期から連なる人びとの移動経験がどのように関係していたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究においては、おもなフィールドである沖縄、台湾、フィリピンに加え、パイン産業に関する文献資料の蓄積が豊富なハワイ、および東南アジアの華人研究に関する文献資料の豊富なシンガポールでも調査を実施した。

沖縄では、戦後米軍占領期に発展し日本復帰を機に衰退したパイン加工産業について、近年になり再びその歴史が脚光を浴びるようになった過程を明らかにするため、米軍占領期における琉球政府関連文書、米国民政府（USCAR）文書、沖縄および八重山の地元紙などを中心に文献資料調査を実施した。

台湾では、日本の植民地期にパイン産業が大きく発展したが、技術や経験がどのように沖縄へもたらされるに至ったのか明らかにするため、総督府の文書や研究機関による資料などを収集した。また、戦後の米軍占領期沖縄へ労働者が派遣されるにあたって、台湾—沖縄間での交流記録をまとめた文書などを収集した。

フィリピンにおいては、ドールやデルモンテなどのプランテーション企業が存在し、また戦前期にはプランテーションでの労働力としてハワイへ移民した人びともいたことから、プランテーション企業の社史、およびフィリピンにおけるパイン産業史を中心に文献資料を収集した。

沖縄、台湾、フィリピンにおいては、それぞれの場所に特化した文献資料が大半であり、パイン産業および華人文化に関する包括的なものは少ないことが予見されるため、本研究ではパイン産業に関しては植民地期以降ハブとなったハワイにおいて、また東南アジア地域でいち早くパイン産業が発展したシンガポールでは華人が深く産業にかかわっていたことから、シンガポールにおいても文献資料収集を実施した。

4. 研究成果

初年度は、おもに以下の2つの課題について文献資料を収集し分析をおこなった。まず1点目はフィリピンにおけるパイン産業の変遷についてである。フィリピンにおいてパイン産業が大きく発展したのはアメリカの植民地となって以降であり、そこにはハワイのパイン産業の動向が大きくかかわっていた。また同時にハワイのパイン産業には早い段階から多くのフィリピン人移民が従事していたことが明らかとなった。さらに、それよりはるか以前のスペイン植民地時代においてもフィリピンではすでにパインにまつわる異なる形態の産業化（ピーニャ：パインの葉の繊維を用いた織物）が進んでおり、そこには華人が深くかかわっていたことが明らかになった。

2点目は、台湾におけるパイン産業の変遷についてである。戦前期のパイン産業がどのように台湾で発展し、沖縄へ導入されることとなったのかその経緯について、台湾総督府の文書なども用い複合的に分析することで明らかにした。また、1960年代に沖縄へ技術導入の一環として派遣された台湾人労働者について、その概要や統計、また沖縄の位置づけについて台湾の僑務委員会がどのように把握しているのか文献資料をもとに分析した。

次年度は、米軍占領期沖縄においてパイン産業に従事していた人びとがどのように農業技術を身につけてきたのか、ハワイをはじめとする環太平洋地域で実施された農業研修について調査研究をおこなった。具体的にはおもに以下の2つの課題について分析した。

まず1点目は、USCAR(米国民政府)による研修プログラムとハワイにおける沖縄系移民ネットワークの活用についてである。米軍占領期沖縄においては、USCARによる農業研修プログラムが数種類実施されていた。沖縄からハワイやフィリピン、台湾などへ研修生を派遣するプログラムのうち、たとえば農業実習生のハワイ派遣事業においては、ハワイ沖縄人連合会が受入機関となりプログラムが進められていたことが明らかになった。

2点目は、台湾における研修と台湾系移民ネットワークの活用についてである。米軍占領期沖縄において八重山はパイン産業の先進地であり、八重山のパイン缶詰会社はそれぞれ直営農場を有するなど栽培技術の研究にも熱心であった。最大手の琉球殖産株式会社は台湾における人脈を駆使し、パイン生産者や農場、工場職員を台湾へ派遣して多くの研修や視察を台湾でおこなってきたことが明らかとなった。

帝国の植民地で発展したパイン産業は、戦後の米軍占領下沖縄で発展するにあたっては戦前から戦後に連なる人びとの重層的なネットワークが大きく関係していた。まず、戦前期からの日本—台湾間のネットワーク、そして沖縄が戦後米軍占領下に置かれたことによってハワイ、フィリピンなどの東南アジアにおいて実施された研修プログラムに関係するネットワーク、さらに戦前期から連なる台湾系住民のネットワーク、およびハワイ在住の沖縄系移民のネットワークがあった。米軍占領下沖縄でのパイン産業の発展には、環太平洋における移民の重層的なネットワークが大きく関係していた点を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 安里陽子「書評 貞好康志著『華人のインドネシア現代史—はるかな国民統合への道』」『アジア研究』アジア政経学会、63巻4号、pp. 63-67、査読無、2017年。

〔学会発表〕(計4件)

- (1) 安里陽子「米軍占領下沖縄におけるパインブーム再考」同志社大学〈奄美-沖縄-琉球〉研究センター定例研究会、2018年。
- (2) 安里陽子「パイン産業の発展にみる沖縄戦後史—1950-60年代を中心に」、沖縄近現代史

若手研究会議第2回研究会、沖縄県立芸術大学、2018年。

- (3) Yoko Asato “The History of Identification: A Case of the Ryukyu Chinese of Yaeyama, Okinawa through the ‘Glorious History of Pineapples’ ”, West Maui Conference on Pacific Peoples and their Environments 2017, Na’ Aikane o Maui Center, Lahaina, Maui, Hawai’ i, 2017.
- (4) Yoko Asato “Development of Collective Identification among the Ryukyu Chinese of Yaeyama, Okinawa through the ‘Glorious History of Pineapples’ ”, Inter-Asia Cultural Studies Conference 2017, SungKongHoe University, Seoul, 2017

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：安里 陽子

ローマ字氏名：Asato, Yoko

所属研究機関名：同志社大学

部局名：研究開発推進機構

職名：特別任用助手

研究者番号（8桁）：30802582

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。